

Title	春雨物語論
Sub Title	A study of Harusame-Monogatari
Author	大輪, 靖宏(Owa, Yasuhiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1969
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.27, (1969. 3) ,p.221- 241
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国語国文学・中国語中国文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00270001-0221

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

春 雨 物 語 論

大 輪 靖 宏

春雨物語研究の歴史は浅い。春雨物語の全貌が我々の前に現われたのは、昭和二十六年のことであるから、春雨物語の研究は、まだ始まったばかりであると言っても過言ではない。しかし、上田秋成の研究は——特に雨月物語の研究は——すでに百年にならんとする歴史を持っており、上田秋成文学について多くの事が明らかにされて来た。そうした多くの先達の研究の助けを借りて、春雨物語とはいかなる作品であるかを考え、あわせて上田秋成が文学についていかなる考えを持っていたかを、幾分なりともはっきりさせたいというのが本稿の目的である。

—

最近、春雨物語の研究はきわめて盛んであり、雨月物語をしのぐほどである。ただ、雨月物語の場合は、怪異小説集という意味においてまとまりを見せており、そのまとまりの中において九篇の短篇を考えようとする傾向が研究者の間にあるのに対し、春雨物語の場合、そうした表面的な統一がとれていないために、十篇の短篇を個々に考察する傾向が研究者の間に強いように思える。春雨物語の

個々の短篇についての出典・成立年代・主題などについては、すでに多くの秋成研究者の手によって、次々と明らかにされて来た。しかし、春雨物語とはいかなる作品かということになると、従来の研究からすれば、色々なものが雑多に入っている短篇集ということになってしまふように思われる。

勿論、個々の短篇についての考察は必要である。しかし、個々の短篇についての考察は、常に春雨物語の中的一篇ということ念頭において、他の短篇との関連の上でなされねばならないと思う。ところが今までのところ、個々の短篇の考察がさかんで、そこではその短篇にのみ通用する結論を出し、これと他の短篇との関係をあまり考えていないようなのである。例えば「二世の縁」であるが、この短篇は秋成の仏教否定の思想が小説の形をとって吐露されたものと考えられている。なるほど「二世の縁」のみを取り出して考えればこうした見方も可能かも知れないが、春雨物語の他の短篇と比べ合せてみると、必ずしもそうは言いきれないのではあるまいかと思う。というのは、春雨物語の諸短篇では、仏教はかなり重要な役割を荷なっているからなのである。「血かたびら」では、仏僧である空海が秋成の代弁者の役割を持って登場するし、同じく仏僧である玄奘の栄達を捨てて山野に交る姿も見られる。「天津処女」においても空海は二度にわたって登場し、その思うところをはばからず述べる役割をはたす。「死首のゑがほ」では、五蔵が最後に法師となり、いみじき大徳の名をとったということになっている。「宮木が塚」では、宮木が最後にすがったのが法然上人であり、法然上人の念仏を受けて死んでいく。「樊噲」では、あらゆる悪を行なった大蔵が一人の直き法師に接することによって行ないの道に入っているし、大蔵自身も大和尚として往生をとげている。こう考えて来ると、「二世の縁」は仏教を否定した作品だと言いきってしまつてよいものかどうか疑問が湧くし、さらにここから出発して、秋成は仏教を否定していたという結論を出すことには一層の疑問を感じる。

秋成は、この作品では仏教を攻撃してみよう、この作品では仏教を良い方に利用してみようというような作り方で、小説を作っている作家ではない。むしろ、自分の信ずるところを、繰り返し形を変えて掘り下げていくタイプの作家なのである。そしてその作中には、しばしば秋成の思想がナマの形で——ややともすれば小説作品としての感興をそぐほどに——現われてくるのである。その意味で、秋成という作家は、自分の思想を一応棚上げておいて自分の思想に反した作品を作るといふことはしないと言つてよい。「二世

の縁」の場合も、他の作品との対比の上で秋成の仏教観を考え、そこから理解すべき作品であると思う。

「二世の縁」の例はほんの一例にすぎないが、これだけでも、春雨物語の中の各篇を検討するときは、常に全体を眺めていなくてはならないということを示唆していると思う。

しかも秋成は、これら十篇の作品をわざわざひとつにまとめているのである。この十篇がバラバラのものであれば「月の前」や「剣の舞」の如く他に付して発表しても良い筈であるし、「ますらを物語」や「鶯央行」の如く単独に人に渡しても良い筈である。又、必要とあらば「背振翁伝」の如く金子と引換えにすることも可能であった。秋成が「血かたびら」を始めとする十篇をひとまとめにしたについては、やはりそれなりの理由があると考えねばならぬ。

さらに秋成は、この十篇を統合する題名としてモノガタリという言葉を使った。その上、巻頭には「物がたりざまのまねびはうひ事也」という一節を含む序文もつけている。我々が春雨物語を考える場合には、このモノガタリという観点から、春雨物語十篇をまとめて考えてみる必要があるのである。そして一見バラバラのものに見える春雨物語の諸篇が、いかなる統一性を持って秋成という人間の中におさまるのか、逆に言えば、秋成という人間のどの面がどのような形で春雨物語諸篇に現われているのかも、考えてみなくてはならないのである。

二

春雨物語を、モノガタリという観点より、一つのものとして考えてみようとするとき、まず問題となるのは、春雨物語序文の解釈であらう。

はるさめけふ幾日、しづかにておもしろ。れいの筆研とう出たれど、思ひめぐらすに、いふべき事もなし。物がたりざまのまねびはうひ事也。されどおのが世の山がつかきたるには、何をかかたり出ん。むかし此頃の事ども人に欺かれしを、我又いつはり

しらで人をあざむく。よしやよし、寓ごとかたりつゞけて、ふみとおしいたどかする人もあればとて、物いひつゞくれば、猶春さめはふる〜。

この春雨物語序文の「物がたりざまのまねびはうひ事也」という一節について、現在、大きく言って二通りの正反對の解が行なわれている。

一方は重友毅氏の「物語めいた書きぶりは初心者のこと。(暗に雨月を指すか)^(注1)」という解釈である。春雨物語には論議的な傾向を示す短篇が多いが、これは雨月物語のような物語形式を捨てて、秋成が自由に国学者としての見解を吐露したからであると、重友氏は考えておられるのである。

もう一方は中村幸彦氏の解で、中村氏は「うひ事」を初めてのこととされ、王朝物語体を模倣することは初めてのことであるとされた。^(注2) 中村氏は又、「重友氏はこの一句を雨月物語の創作を回顧したのであらうと解されたが、私はさうはとらない。物語のやうな作文とすなほに解す。物語とは源氏宇津保の如き中古の小説をさす。云ふ所は、擬古文体の小説は初めてだとなる」^(注3)とも述べておられる。

この二説を比べると、端的に言えば、重友説では雨月は物語であるが春雨は物語形式を放棄したものということになり、中村説では雨月は物語ではなかったが春雨は秋成にとって初めての物語だということになる。重友・中村両氏の説はこのように正反對であるので、このどちらに従うかによって、春雨物語に対する考え方が大いに異なってくる。そこでまず、この両氏の説の検討から始めたい。

重友氏に従えば、春雨物語は「物語といふものの一般形式に拘泥しない」^(注4)で書かれたものということになるのであるから、氏の言われる論議的傾向の強い作品が、特に「歌のほまれ」の如き論議だけに終始している作品が、春雨物語の中に含まれていることも一応説明がつく。しかしながら、それでは何故この短篇集がモノガタリという題名を持っているのかということの説明がつかなくなるのであるまいか。勿論、重友氏はこの点についても周到に論じておられる。^(注5) 重友氏の説によれば、春雨物語は論議的な傾向の強い作品が多く、それは物語形式に拘泥しないで秋成が書いたためだが、それにもかかわらず物語の名を冠せないではおれなかった別の事実があるのであって、それは「捨石丸や樊噲のやうな短篇が、同時にそこに含まれてゐることによるのであって、それらには全く右に見たや

うな知識的論議の断片をも見出すことができないのである」「かうして春雨は、捨石丸や樊噲を代表とする数篇の物語的作品をそのうちに含むことによつて、一方の論議的傾向の過剰にもかかわらず、物語の名を冠せらるるにふさはしいものとなつてゐるのである」ということである。しかしこれによれば、物語的な作品と論議的な作品との二種類が、春雨物語の中にあることになつてしまふ。そして、題名は物語的作品を意識してつけられ、序文は論議的作品を意識して書かれたことになるのではあるまいか。くわしくは後述するが、私は春雨物語はあくまでもモノガタリという観点からひとつにまとめて考えるべきであると思つてゐるので、春雨物語諸篇を二つの傾向の作品群に分けてしまふことは賛成できない。そして、その作品群の一方を意識して題名がつけられ、他の一方を意識して序文が書かれたとは考えたくないのである。

それでは中村説はどうか。中村説によれば、春雨物語こそ秋成が初めて書いた王朝物語体の小説だということになるので、この短篇集がモノガタリなる題名を有していることは素直に理解できる。しかし、王朝物語体という点からすれば、春雨物語は秋成にとつて初めての作品ではないのではあるまいか。かつて他の場所で述べたことがあるので、ここでは雨月物語についてくわしくは触れぬが、秋成は雨月物語を書いた時にこそ、王朝物語の形式を種々利用してゐるのである。雨月物語と春雨物語とを並べて、王朝物語体という観点より見た場合、雨月物語の方をこそ王朝物語体の模倣として挙げるべきではないだろうか。

このように考えてくると春雨物語の序文はもう一度考え直してみる必要がある。

まず考えてみなくてはならないのは、モノガタリという言葉の意味である。雨月物語と春雨物語の間には約三十年の年月がある。しかもこの三十年というのは、秋成の国学研究が大きく進んだ期間なのである。従つて、雨月物語と春雨物語とは、形の上でもそうだが、文学的に見ても大きな差があるのである。(いかなる差異があるかについては次章で述べる) それにもかかわらず、雨月物語と春雨物語の両方がモノガタリなる題名を有しているということは、モノガタリというものに対する秋成の考え方が、実際に雨月物語と春雨物語の差となつて現われている如くに、変化したと考えねばならぬ。しかも雨月物語の三十年の後に成立した春雨物語の序文において、秋成自らが「物がたりさまのまねびはうひ事也」と言つてゐるとあればなおさらである。それでは雨月物語と春雨物語とのいずれ

がいわゆる物語の態をなしているかということになるが、雨月こそ王朝物語の形式・手法を利用した作と考えるべきであろう。従って秋成が、雨月とは異なった型の作品を書き、それをモノガタリと名づけたについては、王朝物語を脱したモノガタリというものを考えていたと見るべきである。

さて、この観点から春雨物語序文をもう一度考えてみなくてはならない。

「うひ事」は「うひ学び事」であろう。やさしい事の意である。「ものがたりさま」とは、モノガタリそのものではない。モノガタリめいたものである。即ち、「いわゆる物語」であって、世間で普通にモノガタリと呼ばれているものの形式（即ち源氏物語などの平安朝物語の形式）を指す。つまり、「ものがたりさまのまねび」とは、平安朝物語のまねごととの意であろう。従って「ものがたりさまのまねびはうひ事也」とは「世間一般に言う物語形式をまねる事はやさしい事だ」ということに解せられる。言いかえれば、「源氏物語などの亜流となるようなことをするのはたやすい事だ」ということになる。秋成は、いまさら源氏物語めいたものを学んで繰り返すつもりのないことを言っているのである。

これを次に続く「されどおのが世の山がつめきたるには、何をかかたり出ん」と合せて考えてみれば、「源氏物語などの亜流となるようなことをするのはたやすいことだが、しかしながら自分は山がつめいた人間であるから（みやびな生活をしている人間ではないのだから）そんなものは書けないし、又、書くつもりもない（自分は自分なりのものを書くのだ）」ということになろう。

秋成は、いわゆる物語を模倣することは、卒業したと考えているのである。従って、今度自分の書くものは、世間一般でいうモノガタリ（平安朝物語）とは違うものだとの意識があったのであろう。秋成が、最晩年の自分の作品集にモノガタリなる題名をつけたとき、そのモノガタリなる言葉は、世間一般でいうモノガタリ（平安朝物語）とは違った意味を持っていたことになる。雨月物語を書いた時に比べて、秋成はもっと、モノガタリというものについて深い考えを持っていたと考えられるのである。そして、世間で普通に言うモノガタリのまねごとなら容易であるが、自分はそんな源氏物語などの亜流となるものは書かぬことを序文で示し、これこそ自分の言うモノガタリだの意をこめて、自分の作品に春雨物語と名づけたのである。

それでは、秋成の考えたモノガタリとはいかなるものであるかということが、当然次に問題になってくる。これについては、十の短篇からなる春雨物語という実物解答について具体的に検討をしなくてはならない。そしてそれは、平安朝物語を意識して書かれた雨月物語と、いかなる点において異なるのかを考えてみなくてはならない。そこまで明らかにしなければ、序文の解釈についての私案も、大方の首肯を得ることは難しいであろうと思う。

春雨物語とはいかなる作品であるかという問題と、序文をいかに解釈するかという問題とは、ひとつの問題なのである。従って、序文の解釈は、春雨物語という作品を考えるための出発点であるが、同時にまた、春雨物語の特質を捉えた上で最終的に考えるべきことでもある。

以下、春雨物語とはいかなる文学であるかを考えてみることにしたい。そして、春雨物語は、秋成の前作である雨月物語と、どのような点で異なっている文学であるかを考えてみることにする。

三

春雨物語を考えるにあたって、まず、その登場人物がいかなる条件下に置かれているかから考えることにしたい。

例えば「血かたびら」であるが、主人公の平城帝は、帝位をねらう皇太弟神野親王（後の嵯峨帝）と、平城帝を思うがままに利用せんとする仲成・薬子等との双方にはさまれており、平城帝としては、そのどちらにもつき得ず、又、そのどちらをも倒すことの出来ないう状態のもとにいる。讓位を迫る側の圧力に対しては、例えば先帝の「みはかまうで」し給うた折に怪しきことが起こるが「兼ねておぼす御國讓りのさがにやとおぼしのどめて、更に御なやみ無」いのであり、又、皇太弟が中国の歴史を説明する如くにして、場合によっては篡奪もあり得ることをほめかすと、何ら反論もせず「あした御國ゆづりの宣旨くだる」こととなるのである。一方、仲成・薬子等のたくらみに対しては「よからぬ事も打ちゑみて、是が心をもとらせ給」うのであり、「あしくためんとするには、御烏帽子かた

ふけてのみおはず」のである。

このように周囲に押されるままになっている平城帝の性格は、見方によればあまりにも無気力である。雨月物語「白峯」における崇徳院が、人間として魔王として、邪魔物を排除するために積極的に行動したのに比べると、平城帝の行動はいかにも物足りない。

しかし、平城帝の持つ悲劇は、日本古来の直き心が外来文化によるさかしき心の中にもあそばれて行く悲劇なのであって、皇太弟も仲成・葉子等も、そのさかしき心の現われの一つにすぎないのである。従って、皇太弟を倒しても、仲成・葉子等を排しても、或いはその両方を除いても、平城帝にとっては根本的な解決とはならないのである。つまり平城帝は、仮りに崇徳院のような大魔力を有していたにしても解決出来ない、複雑な条件下にいたのである。崇徳院の相手は強大ではあったが単一のものであった。しかし平城帝の場合には、意欲的に動いたにしても、自分の執念を単一の方向に向け、それだけで全てを解決することは不可能であったのである。平城帝に出来る唯一のことは、自分に迫る多方面の圧迫を、その全てを見透しながら甘受することであり、全てが自分を中心に派生していることを悟りつついかんともなし得なかった自分を振り返って「あやまりつ」と呟くことだけであった。

史実における平城帝は、自分を守るためにかなり積極的に行動した人であるらしい。しかし秋成は、そうした積極性を持った人物として平城帝を描かなかつた。つまり雨月物語の崇徳院のような方法で、人生が解決出来るとは考えていなかったのである。もはや秋成は雨月物語のような単一な条件のもとに人間が置かれているとは考えていないのである。

雨月物語の主人公達は、崇徳院だけでなく他の人物もみな単一なる目的を持ってそれを達成することに命をかけている。赤穴宗右衛門（菊花の約）は約束をはたすことに、宮木（浅茅が宿）は夫の帰りを待つことに、磯良（吉備津の釜）は裏切った夫に復讐することに、という具合である。そしてその目的が達成されれば、主人公達には満足だけが残り、問題は落着するのである。

しかるに春雨物語の主人公達は、単一の方法では問題を解決し得ない条件下にある。宗貞（天津処女）は藤原氏の外戚争いと色好む帝との間を生き抜かねばならぬ。五蔵（死首のゑがほ）は親への孝と女への愛との間に解決を見出さねばならぬ。宮木（宮木が塚）は男への愛とそれを許さぬ周囲との間で生きる道を探さねばならぬ。雨月物語のように死をかけてその障害を除くことは単純な方法であ

る。ためらいなくその単純な方法の中へ飛び込んで行くのが人間だとの考え方に、すでに秋成は疑問を持っている。ためらいなく一つの方法を選べるような単純な条件下に人間がいるとは、秋成は思っていないのである。

人間を取りまく条件を、単一のものとなせず、複雑なものとした点をもって、春雨物語の第一の特徴とする。

人間を取りまく条件を複雑なものとしていると同時に、次に春雨物語の特徴として挙げ得ることは、一人の人間の中にも複雑な要素を秋成が見出ししていることである。

「血かたびら」の平城帝にしても「善柔」であると共に「直き」性質を持っている。平城帝は、「直きをつとめん」と考え、それに従って自分の意思で讓位の時をきめるのであるが、一方善柔なるがために「直き」に徹することも出来ず、仲成・葉子等の「よからぬ事も打ちゑみて、是が心をもとらせ給」うこともするのである。こうした一人の人間の中の多面性は、春雨物語の他の短篇の主人公達にも多かれ少なかれ見出し得る。

「宮木が塚」の主人公宮木にも同じことが言える。宮木は、売られる時には「御ゆるしある所ならば、いづこへも行くべし。女はおとなに成らば、必ず人に送らるるものならずや」と従い、遊女になる時には「母のゆるして養なはせしかば、うらむべき人無しとて、心をさだめ」る従順な女性である。が、一方、十太兵衛という恋人に対して「この君の外には酌とらじ」とつくし、十太兵衛の不幸に際しては食事も断って無事を祈り、十太兵衛の悪仇にあたる藤太夫には「露したかぶ色め」も見せぬ心の通った女性でもある。十太兵衛の死後、主人と藤太夫とにせめられ「ついに枕ならべ」る弱さもあると共に、十太兵衛の死因を知って決然死を選ぶ強さもある。

このように春雨物語の主人公というのは、平城帝にしても、宗貞にしても、捨石丸・樊噲にしたところで、強いような弱いような、一口に規定出来ぬ性質を持っているのである。

雨月物語の場合、その主人公の性質は一語でもって言い表わすことが出来る。雨月物語では一つの徳目を具現する人間が各短篇に登場する。つまり特定の徳目を特定状況の中に置き、人間がどう動くかを見たものが雨月物語なのである。雨月物語「菊花の約」で

は、信義という徳目が障害の中でどう守られるかということであった。そしてその障害が大きければ大きいほど、信義を守ろうとする宗右衛門・左門の二人の行動が生きてくるのであり、死をかけてまで徳目に殉ずる主人公の姿によって、人間の強さ偉大さが描き出されてくるのである。その徳目の達成という点に向って、緊密に構成が整えられ、少しの破綻もなくまとめられているのが、兩月物語の世界である。

しかるに春雨物語では、徳目で人間を作っているのではない。別の言い方をすれば、一人の人間を一つの徳目で規定するということが出来ないのである。「死首のゑがほ」の元助は、信義という徳目を押し通すためには人を殺さねばならぬ。しかも自分の一番愛する妹を殺さねばならぬ。つまり一つの徳目を押し通すためには他の徳目を犯さねばならないのである。こうしたモラルの持つ残酷さにまで秋成の目が及んでいたとさえ考えられる。

こうして春雨物語の主人公達は、自分を取りまく条件の複雑さのために、それにもまして自分の中の多面性のために、なかなか行動を起こし得ないし、又、起こしても往々にして矛盾した行動となる。春雨物語の主人公というのは、ちょっと見ると、強いのか弱いのか、利口なのか馬鹿なのか、善い人間なのか悪い人間なのか、決断力があるのかないのか、分らないように描かれている。目的に向って一筋に進むことが出来、しかもその方向が万人から支持され得た兩月物語の主人公とは好対照である。しかし、こうした春雨物語の主人公のような人間こそ本当の人間だと、晩年の秋成は考えていたのである。

人間を単一の性格から規定せず、多面的な要素を持つものとして見る、これを春雨物語の第二の特徴としておく。

第三に春雨物語の特徴として挙げ得るものに、春雨物語では善悪の観念が世俗的な善悪の観念と異なるという点がある。

兩月物語の場合には、誰にも納得のいく結果が用意されていた。例えば、「吉備津の釜」における磯良の正太郎に対する復讐は言語に絶した残酷さを持っているが、冒頭において秋成は、磯良の貞淑さとそれを踏みにじる正太郎の行為を十分に描いているのである。

つまり後半部における磯良の復讐は——いささか度が過ぎていている感はあるにしても——万人の当然とするところであり、いわば因果応

報なのである。

しかし春雨物語はそうではない。むしろ普通の倫理観念からすると納得のいかぬ結末となっていることが多いのである。「血かたびら」において、勝った嵯峨帝が良い人間で、敗れた平城帝が悪い人間だとは言ひ切れない。「天津処女」においては、忠直なる和氣清麿は不幸に終り、巧みに生きていく宗貞は大出世をする。「契膺」に至っては、父・兄を殺し、盗み・博奕をして歩いた大蔵が大和尚として往生をとげている。これを、悪いことをした方が得なのだという悲観的な人生観を、秋成が持っていたと解せるのなら簡単である。しかし春雨物語の主人公達は、生きるための真摯なる努力を常に続けているのであって、悪の讚美をしているのではない。つまり春雨物語の世界は世間的な倫理観念の物指しでは測れないということなのである。

「天津処女」における宗貞を例にして考えてみる。「宗貞さかしくて、まつり事はかたはしばかりも御答へ申さず、ただ御遊びにつきし子どもを、しかせしためしなど、御心をとりて申す」という態度で帝に接するのが、宗貞の処生術なのである。この時代は藤原北家の力が次第に強大となって来る時期であり、外戚の激しい権力争いが行なわれた時代であった。従って宗貞のような人間は、天皇に愛されても（或は、愛される故にかえって）こうした生き方しか出来ないものである。うっかり政治に口を出せば、外戚の強大な力に押しつぶされることは明らかなのである。「みはうぶりの夜より、宗貞行へしらず失せぬ。是は太后・大臣の御にくみを恐れて也」の一節にも、宗貞の置かれた危い位置が示されている。秋成は、この激しい歴史の流れの中でこうした生き方しか出来ず、又、そうした生き方で出世をとげていく宗貞に、注目しているのである。置かれた状況と、性格とからして、宗貞にはこれ以外の道がないと、秋成は考えていたのである。従って、こうした宗貞を世間一般の倫理観念でもって測ることはせず、ましてや因果応報的な結末をこれに付そうとはしなかったのである。

「人の善悪邪正も又世につれて理断同じからず」(胆大小心録)と秋成は言う。「人云^ツ美^ト我見^レ之^ヲ醜^ト。美醜不^ニ相分^レ、則^チ又無^レ有^レ善悪邪正^ト矣」(胆大小心録異本)とも秋成は言う。善悪邪正というものも絶対的なものではなく、時代によっても個人によっても異なるものだと言うのである。この考え方からすれば、春雨物語に世間一般の倫理公式があてはまらぬのも当然である。平城帝の生き方が悪

と言えるか、宗貞の生き方が悪と言えるか、人間にはこうした生き方しかないではないか、というのが秋成の投げかけた疑問なのである。

雨月物語「蛇性の姪」において、豊雄が邪神に乗せられたのは丈夫心がないためと説明されている。そして豊雄が心を取り直して結婚した後「かの蛇が懸想せしこともおろおろおもひ出づるなるべし」という具合に心に隙を持つてくると、又真女子が現われる。最後に豊雄が「おのが命ひとつに人々を苦しむるは実ならず」と心を取り直して邪神に立ち向うと、命が助かるのである。このように雨月物語の世界では、神も人間も、倫理的な公式に従って行動していた。従って雨月物語の主人公達は、この世を支配する倫理観念に従っていれば悲劇が起こらないのである。「吉備津の釜」の正太郎も倫理を踏みはずしたために悲劇が起こるのであり、「青頭巾」の僧のように踏みはずした倫理から立ち直れば救われるのである。

しかるに春雨物語では、もはや倫理的な公式が人間を支配してはいない。「樊噲」のように、あらゆる悪をおかした人間が大和尚として往生をとげているのである。「青頭巾」の僧が超現実的な力の助けによって倫理的に納得のいく解決を得たのに対し、「樊噲」では悪そのものが解決になっているのである。春雨物語を書いた時の秋成は、モラルのような権威を認めていないのである。むしろ「死首のゑがほ」で描いたように、信義というモラルを押し通すと最愛の妹を殺すことになるというように、モラルの持つ残酷さをまで描いているのである。

倫理的な公式で人間を動かしてみせた雨月物語に対し、倫理的な公式に捉われない立場で人間を描いていることが、春雨物語の第三の特徴として考えられよう。

雨月物語の世界ではすべてが倫理的公式に従って動いていたが、その倫理的公式の中において、歴史を、社会を、人間を動かしているものは、神であり個人であった。「吉備津の釜」では、吉備津神社の託宣通りに人間関係が進んでいく。「白峯」の崇徳院は、人間としては上皇の位にあって保元の乱を起こし、配所にあつては平治の乱を起こさしめ、さらに死して後は大魔王となって源平の大乱を引

き起こす。社会を——更に社会の時間的な流れである歴史を——支配するものとして、神や個人の強大な力を考えているところに、雨月物語時代の秋成の思想があった。

これに対して春雨物語では、人物が倫理的公式に従っていないことは前述した通りであるが、さらに、歴史や人間を動かしているものとしての神や個人という特定の強大な力もないのである。春雨物語「血かたびら」は、歴史を人間が変えるのではなく、歴史に人間が変えられるさまを描いているのである。平城帝の現実での立場は、雨月物語の崇徳院の現実での立場よりも、歴史を動かかしやすいものであったと思われる。それにもかかわらず「血かたびら」は「白峯」のような経過をたどらなかった。「血かたびら」の平城帝は周圀の諸条件によって次第に悪い方へ流されていくのであり、この周圀の諸条件は、神や特定の個人の作ったものではなく、複数の人間のぶつかり合いによって生じたものなのであった。平城帝と皇太弟、平城帝と仲成・薬子、皇太弟と仲成・薬子というような、色々の人間のぶつかり合いの流れが歴史であり、こうした中に生きるのが人間であるというのが、秋成の歴史小説なのである。

「天津処女」の取りあげた時代も、外戚の激しい権力争いの行なわれた時代である。伴の健岑・橘の逸勢の乱も、その権力争いによって作り上げられたといわれているが、秋成はこうした動きを、歴史を変えんとする特定の人間の（又は神の）行為の現われとして、小説に取りあげようとはしなかった。これらの動きは、自然現象であるかの如き書き方で、「天津処女」の中にその一端が示されているだけで、秋成の目は、この激しい流れの中で彼なりの生き方をしていく宗貞にそそがれているのである。

「事物みな自然に従て運転するを、其勢に対へ立て止むべきにあらず」（呵刈叟）というのが秋成の考え方である。自然に従って流れていくものの中で、人間がどう生きるかが春雨物語に描かれているものなのである。元助も五藏も、捨石丸も宮木も大藏も、みな自分の力ではどうすることも出来ぬ状況の中に置かれている。その状況は、特定の個人や神によって作られたものではなく、複数の人間のぶつかり合いによって作られたものである。つまり周圀は自然に従って動いているのである。その中で、どうすることも出来ずに押しつぶされていく、又は、必死に自分の道を模索する、これが人間だということである。

雨月物語の世界では、人間は超自然的な力を得ることによって周圀の状況を変え目的を達成する。しかし春雨物語ではそんな安易な

道は人間に残されていない。「神は神にして、人の修し得て神となるにあらず。(中略)さればこそ人の善悪邪正の論談なき歟」(胆大小心録)というのが晩年の秋成の考え方である。春雨物語の世界では、人間はもはや神に転身して目的を達することが出来ない。あくまでも人間として行動する以外に道がないのである。しかも人間は、神に転身出来ないだけでなく、神にすぎることも出来ない。春雨物語の神は、善悪邪正が人と異なるものであるから、「樊噲」に現われる如く、人間世界を支配するものとしてではなく、気まぐれな恐ろしい存在としてのみある。結局、人間は、「樊噲」の大蔵のように、神に恩寵も受けず支配もされず、人間との触れ合いによって自分の道を得ていくのである。

歴史や人間を動かす特定の強大な存在はないということをもって、春雨物語の第四の特徴としたい。

以上、春雨物語の世界が、雨月物語の世界とどのように違うかを、便宜的に四つの条に分けて考えて来たが、これらは結局一つの事を指向している。即ち、人間とはいかなるものかという秋成の認識である。この秋成の人間に対する認識が、色々な形となって、春雨物語の諸篇に現われているといえるのである。

個人・神・因果・倫理というような公式が人間を動かしているのではない。しかも、人間を取りまく条件は複雑であり、人間それ自体が多面的な要素を持っている。従って、こうした人間と人間との触れ合いは公式的な結果をもたらさぬし、こうした人間達の総合的な結果である歴史も、特定の方向を示さない。これが秋成の人間観であり、この秋成の人間に対する認識は深く且つ正確であったと言える。そしてこの人間観を作品化したものが春雨物語なのである。

春雨物語の各篇には同一テーマの重複はない。人間の複雑多岐な面を、それぞれの角度から一短篇となして描いているのである。秋成は、雨月物語を書いた時には、一つの徳目を特定の条件下に置くという方法で一短篇を作ったが、この雨月物語の場合も九篇にはテーマの重複は見られない。秋成の短篇集を編むときの用意周到さを知るべきである。春雨物語においても、この態度は保持されており、「血かたがら」「天津処女」の如きも、似かよった状況を設定しながらも、平城帝と宗貞という違った生き方を描いてみせているの

である。

秋成はそれぞれの短篇においてさまざまな角度から、しかもそれは重複することなく、これが人間だとの人間批判を行なつて来た。歴史・社会・学問・宗教もすべて人間が織りなしたものであるから、当然、歴史批判・社会批判・学問批判・宗教批判も、人間批判の一端としてそこに現われるのである。

秋成は、歴史批判・社会批判・学問批判・宗教批判を通して、これが人間だとの全体的な批判を行なつた。こうしたさまざまな面から人間批判を行なつて、これをひとつにまとめたものが春雨物語なのである。この意味において春雨物語はひとつなのである。秋成、が十の短篇をひとつにまとめ、それにモノガタリと名をつけた理由も、そこに見出さねばならないのである。

四

春雨物語において人間がいかにか描かれているかということをお前章において考えてみたが、次に、この春雨物語を支えている秋成の思想がいかなるものであるかを考えてみたい。

秋成は「人の善悪邪正も又世につれて理断同じからず」(胆大小心録)と言ひ、「人云フ美ト我見チ之醜ト。美醜ニ相分レ、則チ又無レ有ル善悪邪正一矣」(胆大小心録異本)と言つて、善悪邪正というのが、時代によつても人によつても異なるものと考えている。即ち、絶对的な善悪邪正というものはないと考えているのであって、「是は必是、非は必非と思ふは愚のみ、非には是、是には非の弊有も自然の事理ぞ」(安々言) という考え方になるのである。従つて、一人の人間を見た場合にも、善悪邪正のいづれへか分類してしまうという事は、秋成はしないのであって「人ひとりがうへに善きと悪しき打ちまじりたるは、今も求めんに、億兆の中多くは其人なるべし」(ぬは玉の巻) というように、一人の人間の中に善悪が入り混つてると考えるのである。

こうした人間が行動した場合「稟け得たる善悪により、さまざま所業のたがふ」(遠馳延五登) こととなるのであって、常に一定の

公式的な行動を人間がとるとは限らないのである。従って秋成は記紀を読んでも「太古と雖性の邪正曲直は自在に稟得たり、雄尊の勇悍正邪時に応じ事に臨みて一ならず」（安々言）という感想を得ることとなる。人間というものは昔から今に至るまで、多面的な要素を持って居るが故に、一ならざる行動を取って来たこと、秋成は考えるのである。

歴史の上でも、聖代であっても画一的なものでなかったと秋成は考え、「西土にても三代不同政と云り、是自然の事理也」（安々言）という。歴史というものは人間が織りなすものであるから、人間の行動を「一ならず」と考える秋成からすれば当然の帰結である。そして、この歴史を変えるものは特定の強大な力ではない。「強を以て弱を圧すは一旦の事のみ」（安々言）であり、「事物みな自然に従て運転する」（阿刈叟）ものなのである。宣長が復古をとなえたのに対し、秋成は「擬古は学びて得べし、復古は学者の贅言なり」（同右）といい、「今日の弊風うれたしとて、一民の努力にはいかむともすべからず」（同右）と、個の力によって歴史を変えることを不可能としている。「然れども天地の無窮なる間には、自然の運転にて古に復する時も有まじきにあらず」（同右）であって、仮に古に帰ることがあるとすれば、それはやはり自然の運転によるものなのである。秋成は国学者の一人として、古代に憧憬の念を持っていたが、それにもかかわらず右のような考え方から、「往時は往時にして宜しく、今世は今世にて宜し」（同右）と、今の世を認めることもするのである。

世の動きを、人力ではいかんともしがたいとする点においては、秋成の考えは本居宣長の考え方と一脈通ずる所がある。宣長も秋成の問いかけに対して「事物皆自然に従て運転するを、其勢に對立て止むべきにあらずとは、余がもとより常にいふ所なり」（阿刈叟）と一応は秋成の意見に賛成している。しかし宣長は、世を動かすものとして神を考えているのであって、「但自然の運転といふは非なり、運転は神たちの御しわざなり、抑世中の万の事はことごとく神の御心より出で、その御しわざなれば、よきもあしきも人力にてやすく止むべきにあらず」（同右）というのである。宣長の考え方からすれば「神は人にて幽事おぼすは、人のはたらくが如く、世中の人は人形にて」（玉くしげ）現実の人間の動きというのは、神にあやつられる人形の動きの如きものである。従って人間から見た神というものも「理リの当トウ不フをもて思ひはかるべきものにあらず、たゞその御怒を畏みて、ひたぶるにいつきまつるべき」（古事記伝）ものなのであ

る。そして世が乱れたりすることもあられるけれども、神代に定まった道理というものがあつて、結局は「悪はつひに善に勝つことあたはざる」(玉くしげ)ものなのである。

このような宣長の神対人間の關係に比して、秋成は神が人間を支配するとは考えていない。秋成もまた神の存在を信じているが、その神というのは、「神は神にして、人の修し得て神となるにあらず」(胆大小心録)であり、「善悪邪正人とこと」(同右)なるものであり、「我によくつかふる者にはよく愛す。我におろそげなれば罰す。狐狸に同じきに似たり」(同右)というものである。秋成はこうした神の行動の例を胆大小心録の中にいくつも挙げてゐる。例えば祝部の怠りによって浅間明神が怒り、富士が噴火して多くの人々に災害を与えたことに對し、「神もし祝部のみ罪せば罪せよ。この大災をつとめて何ぞこゝろよしとするや」と神に抗議してゐる。

秋成における神とは、人間を支配するものでもなく恩寵を与えるものでもない。神は神であつて、善悪邪正を人間と異にしており、人間と無關係に行動してゐるものなのである。その神の行動がたまたま人間と触れ合つたとき、人間は幸いを受けたり災いを受けたりする。従つて、神は歴史の流れや人間を、特定の方向に向けて支配してはいないのである。それ故、人間は神に頼つて生きることは出来ないし、神に支配されるままになつてゐることもならぬ。神の怒りは怒りとして恐ろしいものであるが、その中で人間は自分の力で生きていかねばならないのである。春雨物語「樊噲」には、こうした神に對しての人間の生き方が描かれてゐる。

秋成の考え方によれば、人間世界を動かすものは神でも個人でもない。多面的な要素を持った複数の人間のぶつかり合いによつて人の世は動いていくのである。「むかしの人も、世にあへるあり、時を失へるあり、其跡いとも多かめるを、更にかぞへあげんが煩はしき、世にあへるが賢きにもあらず、時うしなへるが愚なるにもあらず、身の幸ひのおくれさいだち、あひあはぬにこそあらめ、世に遇てはまれとる人の、後におとしめらるゝもあり、楽しとするもうしといふも、求るままにはあらぬ、誰が与ふるたま物ぞや」(藤篋冊子)と秋成は人の世の不可解さを嘆じてゐるが、秋成はこの人間世界の不可解な動きを自然の運転と考えたのであり、その中を流されていく一人一人の運命を命禄と呼んだ。「世にあひ遇ぬに命禄あり」(金砂)と秋成は言い、「稟け得たる命禄の外はたのみがたし」(遠馳延五登)と言う。秋成は「ししてしれぬ事をしらんとするは、かへりて無識じゃ」(胆大小心録)という考えにより、不可解は不可解

のままでおき、無理な画一的な解答を出すことは避けているのである。

そしてこの、不可解は不可解のままとし、物事を公式の中に入れてはつきり割り切ろうとしないところが、上田秋成のすべてに対する基本的な態度である。善悪邪正について、何が善で何が悪かは人により時代によって異なると考えるのも、この態度の現われであるし、人間を善悪いずれへか分類することをせず、人ひとりの上に善悪が両存すると考えるのも、この態度の現われである。秋成は歴史の流れについても、特定の公式あることを示そうとはせぬ。神の意思や個人の力によって動かされるものでないことは言えても、では何が人を歴史を動かしているのかについては、人の世の動きを自然の運転といい、その中での人間の運命を命禄というほかはないのである。命禄とは、人の動きを公式化するための言葉ではなく、人の動きを公式化できないという言葉なのである。

不可解を不可解のままとし、公式化しないという秋成の態度は、学問に対しても同じである。「すべて学文といふ業はいづくの国にても精細にはあらぬは自然の理也。よく行くべきにあらず、行き合すは人の智の工みなり」(神代がたり)と秋成はいう。この学問批判は、公式的観念的な学問に対する批難となつて、春雨物語「海賊」の中に表われている。

宗教に対しても、秋成は画一的な見解を取らない。「仏と聖人は(神に)同じからず。人体なれば、人情あって、あしき者も罪は問はざる也」(胆大小心録)と言ひ、「仏は聖人と同じく、善根をうへて大樹とさかへさせ、ついに世かいを覆ふにいたるべし」(同右)と言つて、儒仏二教を認めるが、しかし又「皇の学士西土之教道に淫し、万理悉皆彼に出ると思へるは無識也、然ども彼に得たる所有り、此に長ぜる事有り」(安々言)とも言つて、すべてをこれに従うことをいひしめ、長所だけを長所として認めようとする。そして「儒仏の二教貴しといへども、又は非を包み表をかざり、或は法外に心を恣にして己が分を論るは二教の害也」(金砂)と欠点もあることを指摘し、「仏法は大慈悲の志願なれば貴むべし、僧徒こそ忌はしけれ」(遠馳延五登)と、世俗化公式化した仏教関係者に対しては批難の言葉をあびせている。春雨物語「二世の縁」には、こうした観点からの、世俗的な仏教観に支配されている人々への痛烈な批判がある。宣長は外国のものを排斥したが、秋成は外国のものだからといって嫌うことはせず、権威だからといって追従もせず、自由な立場から良い面と悪い面を見きわめようとしているのである。宣長の思想が確固たる体系を持っているように見え、秋成の思想が一見

矛盾して見えるのも、こういうところに原因がある。

秋成はこのように、こだわらずに自由な立場で物事を見ようとしているから、公式的なものには反発する。「西行ほどの上手が、よしの山に三とせこもりて、常見の花を雲じゃくとはどうぞ。此世の人はとかくに雲とみたを、世外の人のおんなじ事おしやつたはいかに」（異本胆大小心録）と、西行が世の人と同じように花を雲にたとえて詠んだことを攻撃する。「梅に鶯、道成寺・三輪、おさだまりの事では風韻といふ事にはいたられぬ」（胆大小心録・書おきの事）のである。しかし秋成は、否定のための否定によって法則を無視しようとしているのではない。「法は芸技の威儀なれば、道々に法なくてはあるべからずといへども、又其法に繋がれて居くどまりたらん、かたはら目にはいとをかししれ人とやあさむべき」（遠馳延五登）なのである。「有法の極は必ず無法に帰るといひしぞ、心ある人の論定なる。しかれば始より法なくては、道々のしるべたどしければ、先づ法に入りて是を心におきて後、ふたゝび局外に出でゝこそ、万のわざはまめくしからね」（同右）と秋成は言うのであって、法は法として認め、しかもその法にこだわってはいけないというのである。春雨物語「目ひとつの神」には、この立場からの、法につながれている既成歌壇への非難があり、「歌のほまれ」には、この立場からの、法にこだわらぬ作歌論が述べられている。

秋成の人間批判は、人間の関与するあらゆる分野にわたっているが、その根本態度というものは、不可解は不可解として無理に公式化しようとはせず、又、既成観念や公式にもとらわれずに、自由に物事を見るところにある。ものにとらわれないのが真の人間だと秋成は考えるのである。こうした眼で人間を見た場合、その人間批判は深く且つ正確なるものがあるのであり、その人間批判の文芸化が春雨物語であると言えるのである。

五

秋成は、春雨物語に先立つこと三十年の昔に——即ち前述した秋成の思想がまだ十分に熟しきっていない時期に——雨月物語を書い

た。そしてその序文において、自作雨月物語を源氏物語と並べてみせた。なるほど雨月物語は雅文を用い、平安朝物語の形式をふまえている。しかし形の上での模倣なら、雨月物語も源氏物語に対抗して長篇となるか、好色一代男の如き形となるかしなければならなかった筈である。雨月物語が短篇の集でありながらモノガタリと名乗り、源氏物語に対抗し得ると秋成が考えたのは、どの点においてであらうか。

源氏物語には、六条御息所は嫉妬、明石上はつましきという具合に、単一モラルを具現した人物が次々に登場する。そして幾多の単一モラルの上に、全体として仏教の因果応報という単一モラルがある。雨月物語もまた、信義とか嫉妬とかの単一モラルを特定の状況のもとに置き、怪異の世界の助けを借りて、人間の強さ弱さを描いてみせた作品なのである。こうした観点から人間を描くものが物語であると秋成は考えていたのであり、この点において雨月物語は源氏物語に匹敵し得たのである。秋成が雨月物語の序文において、表面的には謙辞をよそおって、自分のこんな作品では「醜脣平鼻之報」を受けることはあるまいと言いつつ、自らを「剪枝畸人」（指の切れた片端者）と名乗ったのも、紫式部が人間の業を描いて地獄に堕ちたのなら、俺だってという自信であったのである。

しかしその後、秋成の思想は深まり、人間を単一的公式的な見方にとらえることは出来ないという考え方になっていった。早くから秋成は、物語を「男も女も世にある人のうへを語り出でたるが、おほよそ隠るゝ限なくあなぐり出」（ぬば玉の巻）すものと考えていたので、人間を一面的公式的にとらえた雨月物語には、やがて不満を持ち始めたことと思われる。秋成は最晩年に——即ち、思想の熟しきった時期に——ふたたび物語と題する短篇集を編んだ。当然、そこには深く且つ正確にとらえられた人間というものが描き出されていた。これこそ物語であるという秋成の自負が、春雨物語という題名となって現われたのである。

春雨物語の序文において秋成は、「物がたりさまのまねびはうひ事也」と言った。源氏物語などのまねごとならたやすいことだと言うのである。この時の秋成には「手枕」を書いた宣長のことが頭にあったであらうか。いずれにしても、春雨物語は、平安朝物語の主なる題材である恋愛はとりあげず、人間を正視した作品となり、宣長のいう「ものあはれ」の支配する「手弱女ぶり」の世界とはかけ離れたものとなった。春雨物語にはもはや怪異はほとんど登場しない。しかし怪異はなくとも現実の人間の中に怪異以上の物妻さが

あるのである。もはや雨月物語のように、怪異の世界の助けを借りて、人間の凄さを描く必要はないのである。序文の「おのが世の山がつめきたるには、何をかかたり出ん」という言葉にも、官長的なみやびな世界への反発があるように思える。秋成の試みは、「ものあはれ」という面から人間を描くことではなく、人間を人間としてそのまま描く、いわば「ますらをぶり」の文学を作ることにあつたのである。

春雨物語は、一見、統一のないバラバラの短篇の寄せ集めの如き観を与える。しかし、これは人間批判の形式が自由だということであり、人間批判という点から見ると春雨物語は完全にひとつのものと言ひ得るのである。春雨物語は、人間を直視し、さらには人間の関与するあらゆるもの（学問・文芸・宗教・歴史など）を通じて、人間とはこういうものだということを描き出してみせた文学であると言ひ得よう。

春雨物語は完成された作品ではない。我々は春雨物語の半分を未定稿ともいふべき文化五年本に頼って見るしかなく、残りの半分弱を持つ比較的完成度の高い富岡本もまた決定稿とは言いきれないものである。春雨物語は、まだ秋成の手が加わる余地が残っている作品と考えるべきである。しかし、それにもかかわらず我々は、春雨物語において、物語というものに対する秋成の考えを汲みとることが出来るように思われるのである。

注1 日本古典全書「上田秋成集」一八三頁

2 日本古典文学大系「上田秋成集」一四五頁

3 「春雨物語」二五四頁

4 日本古典全書「上田秋成集」二八頁

5 同右 二九—三〇頁

6 拙稿「初期読本成立の一面——上田秋成を中心として——」（国文学論叢第六輯）